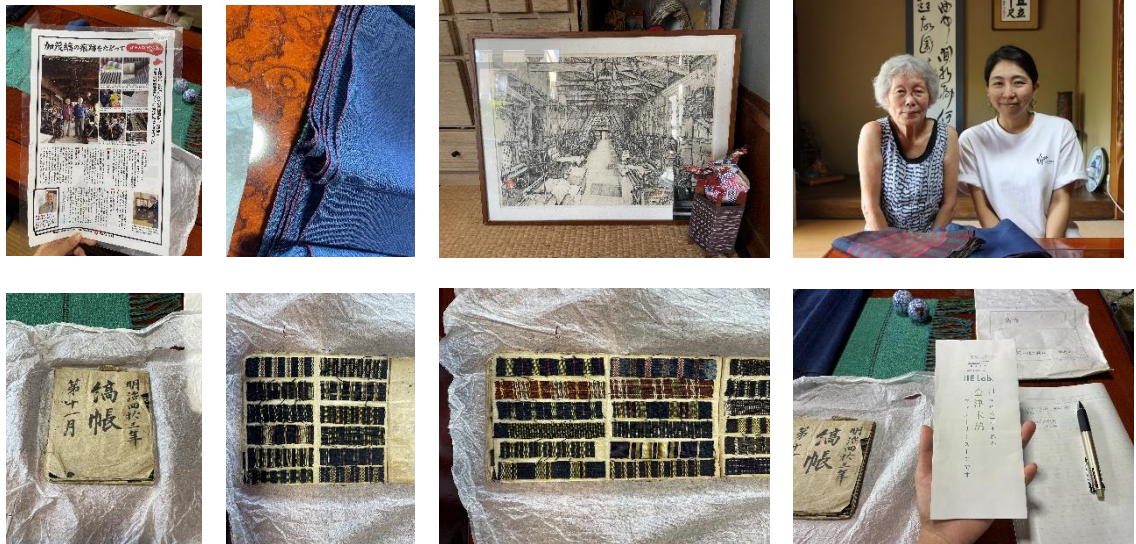


小須戸ARTプロジェクト リサーチ 報告書

報告書作成日：2024年 3月20日

職業	氏名	調査実施期間
作家/彫刻家	大川 友希	2023年8月28日～ 9月1日(5日)
調査内容		調査趣旨
「小須戸縞」についての現地調査		小須戸地域の歴史、小須戸縞の歴史、 変遷、現状について
調査対象・方法	調査対象：小須戸縞の歴史、小須戸縞の職人、繊維産業 調査方法：現地調査、インタビュー	
調査の概要	「小須戸縞」についての現地調査として聞き取りやインタビューを行い地域の歴史や小須戸縞の歴史、模様、変遷、現状について調査し、作品を構想する。	
調査経緯	<p>●8月29日(前日28日到着)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・町歩き(石田さん)(石田高浩さんインタビュー)  <p>・新潟市歴史博物館みなとびあ(学芸課長/森行人さん)(新潟市中央区)</p>  <p>・過去映像(長井さん作業場映像)</p>  <p>●8月30日 福祉事業所ほほえみほのか(おがわとしおさん、ようこさん、又地千鶴さん)</p> 	

●8月31日 長井利夫（小須戸縞職人）さんの奥さまインタビュー



●9月1日

- ・ニット工場見学（株式会社 YOSHIHIDE）



- ・IELAB 会津木綿（近隣の織機）



10月18日 長井利夫（小須戸縞職人）さん訃報（10/15 逝去）

11月5日 小須戸 ART プロジェクト 2023 へ訪問

調査の詳細

○8月28日 日暮れ頃町屋ラボ到着。古民家がたち並び街灯が町を照らす美しい町の風景。

●8月29日

- ・町歩き（石田さん）（石田高浩さんインタビュー）

30度を超す猛暑の中、日陰を探して石田さんと町を歩く。

町の成り立ちやお寺、神社、過去の芸術祭について話を伺う。

▶印象的な話

- ・2011年文化的資産を探るための小須戸ワークショップ開催や2012年～芸術祭（南条さんとの出会い）2013年小須戸 ART プロジェクト開催と町屋ラボ改修の経緯など。
- ・新潟県や小須戸の歴史、住人の数や商店の店舗数の変化。
- ・芸術祭や作家、作品と町との関係が深まる中で町の雰囲気を変えていったこと。
- ・芸術祭の開催からアーティストとの出会い、作品に対する思い、芸術祭の終了からコロナ渦

を経た町や人、環境、時代の変化の中でプロジェクト開催やアートのあり方について思考している。

- 生まれ育った小須戸、新潟県についての思い出の話や思考を巡らせる言葉や表情が印象的。

●8月30日

- 福祉事業所ほほえみほのか（おがわとしおさん、ようこさん、又地千鶴さん）

長井さんに直接、織りの技法を学んだという方にお会いする。実際に織機を使って一段ずつ編まれていく様子を見ることができた。

●8月31日

- 長井さんの奥さまインタビュー

長井さん宅にお邪魔させていただいた。長井さんの工場の話や過去の職人さんのお話を中心に伺う。その中で長井さんの人柄について知る。次第に長井家に嫁がれた奥様についてのお話を伺い、奥様の視点で見た小須戸縞や工場、長井さんとの関係、その半生を伺い、小須戸縞を巡る一人の女性の半生を知った。

▶印象的な話

- パワフルで明るくみんなに愛される長井さんの姿。
- 長井さんは本が好きで小林秀雄全集を持っている。物書きに憧れがあった。
- 長井さんが町の紹介や小須戸縞について精力的に活動していたこと。
- 工場と織機が長井さんにとって非常に大切なものであること。
- 縞帳には様々な織りの模様が残され、日々研究と開発が行われていたことが覗える。
- たくさんの職人さんとともに繊維産業が盛んだった時代の小須戸の雰囲気。
- 奥様にとって嫁ぎ先である長井家での思い出、実家のお父様とのエピソード、工場でのお嫁さんとしての働き方や繊細な気遣いのエピソードに心打たれた。
- 長井さんと奥様、毎日一日の終わりにその日の出来事を話していたというエピソードからお二人の関係がとても愛おしく感じた。
- また会いたいな話したいなと涙を浮かべて呟いた奥様。

●9月1日

- ニット工場見学（株式会社 YOSHIHIDE/吉川英一さん）（秋葉区横川浜）

無数の織機が一定のリズムを刻みながら一斉に音を立てて動いていた。近くに人の姿は少なく機械で制御され、自動で糸が次々に編まれていく。

奥にはミシンが並び職人さんが黙々と作業を行っていた。機械の仕事と人の仕事に分業され、人の手で作られる部分は各部署が決まっていた職人さんによって丁寧に作られていた。

工場内には見慣れた某有名ブランドのロゴやタグを見た。工場の目の前に広大に広がる黄金の稲穂と青空の美しい風景と、人でひしめき合う華やかな都心のガラガラした町のお店やこざれいに整頓された店内にすまして並べられている服をイメージしてそのコントラストの強さが印象的だった。また、個人的には少ないお小遣いを握りしめて雑誌で見つけた服を探して初めて行った南船橋のららぽーとや渋谷のセンター街の情景を思い出した。

コロナ渦を経て試行錯誤しながら商品の製造を続けているという話を伺った。

時代の変化や消費のスピードに適応しながら独自の製法や新しい縫製技術の開発に尽力されている様子が印象的だった。

・IILAB 会津木綿（近隣の織機）（福島県会津）

長井さんの工場にあった織機と同じかたちの豊田式織機株式会社製の織機を使って昔ながらの織りの技法で商品の製造をしているという工場直売所を訪れた。

所感

人間と道具、機械と手仕事、始まりと終わり、そのつづき

今回のリサーチ参加にあたって、印象的だったのは、“もの”を作る人間とその道具のそれぞれのストーリーです。地域に伝承された技術を守り続けた長井利夫（小須戸縞職人）さんとそれを支えた奥様。

丁寧に管理され、美しい小須戸縞模様を生み出し続け、博物館で文化財となった織機。

そして時代の変遷の中で広く継承されなかった技術から本来の技術と元あった織りの技法を応用して時代とともに生み出され機械と人によって作られていくニット工場の様子。

長井さんの奥さまのインタビューでは、毎日のように工場へ向かっては籠もって仕事を続ける長井さんの姿がイメージされた。さまざまなエピソードを伺い、また会いたいな話したいなと涙を浮かべて呟いていた奥さま。

白洲正子の著書の一文が頭をよぎった。「織物は神代時代からあって、きものを織ること、それは女性の仕事であっただけでなく、一種の信仰をともなっていました。たなばたつめは、神に仕える巫女であり、神の衣を織る職業で、ひいては、はたを織ること自体が、神聖なつとめと解されていたようです。」（参照：「きもの美 選ぶ目 着る心」著書-白洲正子）とある。

古来より蚕から紡ぎ出される細い糸を丹念に紡ぎ、織機によって織り上げられていく様子やその膨大な作業を続けることでできあがる衣には、何かを宿した神聖なものとして見たのではないだろうか。また、それを作り上げる技術を持つ職人に、多くの人が尊さを感じたのだろう。もしも長井さんが「棚機津女（たなばたつめ）」だとすると長井さんと奥さまの関係はさながら織姫と彦星。「七夕」のお話を連想した。（※「七夕の織り姫」の起源：万葉集では、神様に捧げる特別な織物を高い柱の小屋に籠もって織り、作物の豊作を祈る女性「棚機津女（たなばたつめ）」として。そして、古事記では、神の衣服を織る仕事をする女神「機織女（はたおりめ）」として登場する女性。この様な謂れと「星伝説」に登場する「織女（織姫）」が類似し、行事として受け入れられたといわれている。）もしも時間を戻せるのなら、長井さんにお会いできたなら、

長井さんの愛した大切なあの工場のどこか一角で、織機を眺めて、コーヒーとか飲みながら、小須戸や縞について話す長井さんと、隣にはにこにこした表情の奥さまと、高そうな素敵なカメラを持った石田さんと一緒に、一段ずつ織られていく小須戸縞を眺めたいな。お話がしたいな。と思った。

「きものは物質にすぎませんが、織った人間の心が、これほど現れるものもありません」（参照：「きもの美 選ぶ目 着る心」著書-白洲正子）2023年小須戸ARTプロジェクトに参加させていただき「小須戸縞」という地域の繊維産業の変遷を通して、細い糸が少しずつ重なって編まれていく織物のように、それぞれのストーリーが交わって、始まって、少しずつ続いて、終わって、またつづきが始まって行く。そんな情景を小須戸縞を通して見せていただいた。



挿絵：機織図屏風（江戸時代の風俗画）

作品のイメージ

織り姫と彦星

終わりと始まりとそのつづき

編む、重ねる、畳む、仕舞う

重なっていくかたち

白紙、染まる



▶形状

- 服を畳んで重ねる
- 柱のように設置
- 長井さん工場の音を流す
- 光を当てる、下から順に音に合わせて光が一段ずつ増えて行く

▶設置の方法

- 服や布製のものを重ねる
- 倒れ防止として天井と床にワイヤー設置

▶地域の協力を必要とする項目

- 地域の古着の回収
(どんな状態でも OK、下着は NG)
- 「畳む、重ねる」ワークショップの実施
(さつま屋、町屋ラボ、地域の小学校や中学校などでワークショップの実施)

※あくまで構想です。要相談。